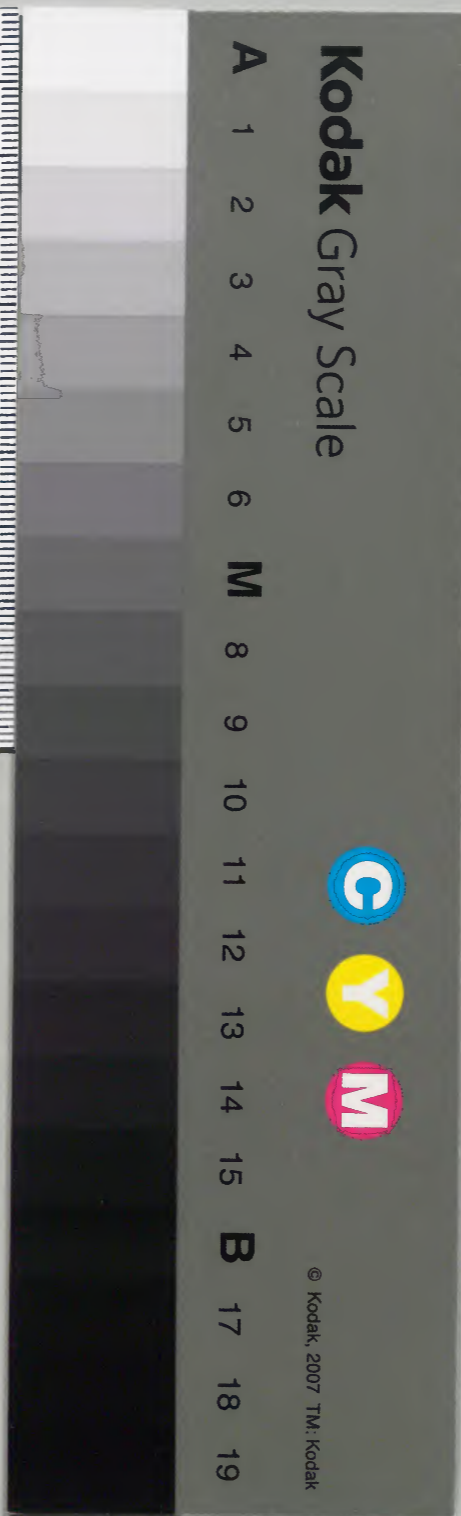


長崎志

和書門			
三三	一七	二四	九
冊	架	函	號

内閣文庫			和書
三三	一七	二四	九
冊	架	函	號

内閣文庫	
番號	和 28409
冊數	33 (8)
函號	175 95



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

第八卷目錄

阿蘭陀方來歷之部

一 阿蘭陀人並ユダ諳厄利亞リス人渡海之事

一 阿蘭陀船平戶着船并御朱印令頂戴事

一 再度御朱印被下賜事

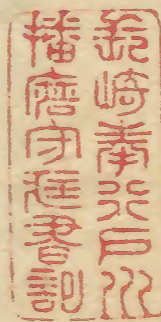
一 阿蘭陀本國并咬啣吧之事

一 阿蘭陀船圖附船役之次第

一 交易往來之諸處里數產物之事

一 阿蘭陀着津平戶ヨリ長崎ニ被移事

一 江府拜禮之事



一 南部より阿蘭陀人被差送事

一 出嶋屋舗修造之事

一 出嶋境内軒敷土藏敷等之事

阿蘭陀人并諸厄利亞人渡海之事
阿蘭陀方來歷之部
阿蘭陀人并諸厄利亞人渡海之事
阿蘭陀方來歷之部
阿蘭陀人并諸厄利亞人渡海之事
阿蘭陀方來歷之部

長崎志第八卷

田邊八右衛門茂啓編輯

阿蘭陀方來歷之部

阿蘭陀人并諸厄利亞人渡海之事

一 慶長五庚子年泉州堺ノ浦ニ大船壹艘來着セリ仍テ其意旨ヲ

尋ルニ阿蘭陀人并諸厄利亞人爲商賣願ノ貴國ニ渡海セシ由訴

之即刻言上有之処其船江府ニ可令乘廻トノ御事ナリ然ルニ彼船

南海ヲ乘廻リ遠州灘ニテ難風ニ逢ヒ相州浦川ニテ破船ス此旨言

上有之處船中ノ人數陸路ヨリ可差越旨被仰下則陸路ヨリ江戸表ニ

參上ニ依之委細被遂御詮議處彼者共日本渡海商賣仕以キ旨

御願申上ル則達上聞處願之通御免被仰出然レ可令歸國乗船
無之江府ニ滞留セリ其間御扶持等被下シ置頭人共折々御城ニモ
被為召外國筋ノ事等御尋有之兩人ノ者上御屋鋪拜領被仰
付ヤンヨウス阿蘭陀人居タル所ヲヤヨスガシト云ア諸厄利亞人居タル所ヲアンジ
町ト云リ

阿蘭陀船平戸着船并御朱印令頂戴事

一 慶長十三戊申年阿蘭陀船壹艘平戸ニ着船ス船中ノ者申上ル八九
年前阿蘭陀船為高賣願日本ニ赴ツキシ其船行方不相知諸方ヲ
尋ル日本ニ在留シ居ル由承リ傳シ故今度貴國ニ渡海仕ル由訴之

依是松浦壹岐守方ヨリ言上有之處江府ニ其船ノ長タル者ヲ可差
越旨被仰下則平戸ヨリ阿蘭陀人ニ警固相添差上ル江府到着ノ上
年來在留ノ阿蘭陀人ニ被引合知則尋來ル者ナリ然ル處ヤンヨウス事
江戸表ニ則居シ故滞留仕タキ旨相願フニ付其儘差置ル高賣御免ノ
事ハ先達テ被差免故今度御朱印ヲ被下平戸ヨリ來シ阿蘭陀人
頂戴之

權現様御朱印之寫

河原院祀日中ニ渡海ノ時何ノ浦ニ碇ル者岸ニ於テ相違ム
向後守守者ニ委儀ニ及仕来御朱印之寫

此件

慶長十四年七月廿日

千ヤクスルウニハイケ

此後數年阿蘭陀船平戸ニ着船シテ商賣ヲ遂ケリ但ヤシヨウス江
戸表ニ滞留シ數年ノ後依願歸國シ追テ彼方ヨリ日本ニ趣シニ臺
灣沖ニテ破船沉溺セシト也

一 右同前ニ諸厄利亞人ニ御朱印頂戴シ十ヶ年余平戸ニ着船シ商
賣ヲ遂ケ其後數年断絶ス

再度御朱印被下賜事

一元和三丁巳年阿蘭陀人ニ再度御朱印下シ賜ル又松浦肥前守ニ
御奉書被成下之

台徳院様御朱印之寫

阿蘭陀高取到本邦渡海ノ節縦遭風波ノ強浪ニ至ル
岸日本國程孰比御以石ヲ相遠也

元和三年八月十六日

ナシレイカホロワル

御奉書之寫

此後京場商人も其地口の船下等
お對次才高賣渡り候むらうと

急度申入の河津泥船於平戸前へのゆくかきりん次才
高貴の船にても及中へは付て速く法に承知
下向船可なり候旨に承知候云

古井大炊頭

安茂對する

板倉伴左衛門

本多上野介

八月廿三日

召浦肥前守殿

人心中

阿蘭陀本國之事

一 阿蘭陀本國ハ日本ヨリ極西ニ當リシ歐羅巴列ノ内ニ有之國都ヲ

アムステルダムト云其地七州有之阿蘭陀其一州也本名拂良氏唐

國ニテ和蘭ト称ス則ホツラシテノ轉音也又紅毛番黃毛番凡称ス

其總司ヲプリンスト云テ七州ノ政務ヲ統掌シム其任尤重シ然レ

凡其身壹代限リニシテ七州ヨリ人品ヲ撰テ交代セシム但六州ハ

地續キニテゼーラント一列ハ離レタル嶋也又一縣一村毎ニボルゴルメース

テルト云テ其所ノ事務ヲ執行ナラ役人アリ

ゼーラント

ボルデルラント

コロニーニヤ

フリーフルエイヌル

ライトレキト

フリーイスラント

ホルラント

即和蘭也

以上

咬啣吧之事

一 南海ニ一大嶋アリ其名ヲ凡哇ト称ス唐韻ニテシヤアト唱フ蠻語ニテ

ヤアハト唱フ其地最モ廣大也阿蘭陀人此嶋ノ内僅ハカリノ地ヲ

借リテ居住ヲ成シ其地名ヲバタアビヤト唱フ是則咬啣吧ト称スル處也

此地ニ出張シテ諸國三十餘ヶ處ニ往來シテ交易互市ノ利用ヲ

求ル由也地内ニ城廓ヲ建其廻リ凡ソ日本ノ出嶋ノ廣サニテ四千坪

ホト可有之由頭人赫業喇兒ヲ居置以下數百人ノ役者ヲ定メ

諸事ノ用度ヲ調達セシメ年々本國ニ商賣等ノ利用ヲ運送

セシムル由也

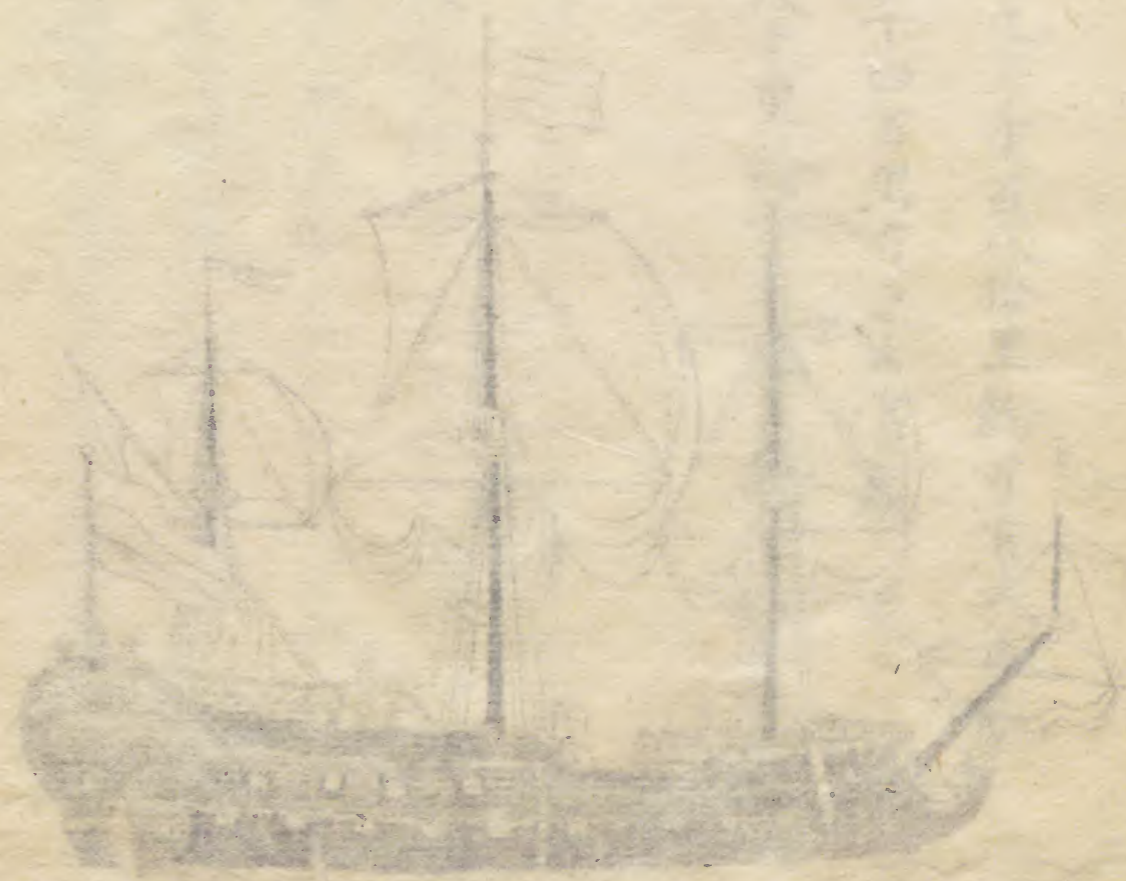
一 阿蘭陀本國ヨリ咬啣吧ニテ海上日本ノ里法ニ積リ凡ソ五千九百六

拾里餘可有之由也

但通詞方舊記ニ壹萬五百里有之由書載シ來ルト云ヘ氏今年

先功ノ阿蘭陀船士ニ委細遂ニ吟味ノ如五千九百六拾里餘可有

阿蘭陀船圖



附 船役之次第

一 阿蘭陀人座列ノ事出島ニテハ甲必丹ヘトル以下藏役筆者等
高賣勘定方ノ者ヲ次第セリ船中ニテハ船頭按針役以下旗役
帆役楫取等乗船要務ノ者ヲ次第ス

出嶋ニテ座列

船中ニテ座列

シツプルホーフト

甲必丹

ステツプル

船頭

テウ子テベルソーン

ヘトル

ステユールマン

按針役

デスベンセイイル

臺所役

コムスターブル

石火矢打

ハツクホイスミスル

藏役

フラツカマン

旗役

シツプルメーステル

上外科

フラツカナナ井

旗縫

ランドルノイステル

下外科

セイルマール

帆役

シヤカトーリス

上筆者

テインムルン

船大工

アシステント

下筆者

シヒシイル

船役

テインムルン

大工

アソカルゴ井

楫取

スミツテ

鍛冶

ウ井ントケン

風見

コイフル

桶屋

マメロトス

水主

神スワルトヨシゴ

高貴島五以上

一門陣列入武門

同書外之

交易往來之諸處里數產物之事

ガルウンラント 人不住 日本ヨリ壹萬五千三百里程

北方極邊ノ地ニ夏至ノ節前後半年ハ晝ト成リ冬至ノ節前

後半年ハ夜國ト成ル冬月寒風烈クシテ波濤高ク起リ其潮

水堅キ氷ト成リ岩窟ノ如シ故ニ氷海ト称ス春夏ノ暖氣ニテ氷

解テ潮水ト成ル此海中鯨魚多シ然ルニ冬月此海中ニテ生育成

リ難キニマ秋分ノ末ヨリ鯨魚南海ニ移リ行テ春分ノ初北海ニ歸

去ル其時節日本諸處ニテ鯨魚ヲ捕テ利用トス夏月蠻人モ此

處ニ到テ鯨魚ヲ捕リ膏油ヲ熬煎シテ治療ノ藥用ヲ求ルト云云

ノウルウイキ 同壹萬三千五百里程

土産 鐵 船ノ柱 同壹萬三千三百八十里程
ズヘイテ 同壹萬三千三百八十里程
土産 銅 鐵 碇 材木 石火矢 船ノ綱 同壹萬三千三百八十里程
デイヌルカ 同壹萬三千三百八十里程
土産 銅 鐵 石火矢 材木 麻苧 同壹萬三千三百八十里程
ムスカウマ 同壹萬四千百里程
土産 琥珀 五穀 畜類ノ皮 同壹萬三千六百五十里程
ポウル 同壹萬三千六百五十里程
土産 琥珀 五穀 畜類ノ皮 同壹萬三千六百四十里程
ドイチラント 同壹萬三千六百四十里程

土産 金銀 水銀 水晶 五穀
フランカレイキ 同壹萬二千八百里程
土産 絲織物 金巾類 酒種 同壹萬二千五百五十里程
トルケイン 同壹萬二千五百五十里程
土産 毛織物 絲織物 金入織物 金巾類
ケ子イ 同八千四百里程
土産 金 象牙 鶯哥 砂糖 氷白
ブラセリヤ 同七千五百里程
土産 材木 黑檀 砂糖 氷白 煙草
カアプテボーナイスペランカ 同六千三百里程

土産 虎 犀 牛 鹿 猪 駱駝 鳥

一ロカ 同千七百里程

土産 錫 米 獸類 胡椒 燕窩

ヘイグウ 同二千六百四十里程

土産 亞鉛 阿仙藥 象牙 米漆

アラカン 同貳千九百四十里程

土産 金 米 蠟 網 象牙 麻 苧

ベンガラ 同三千三百里程

土産 麝香 牛黃 阿片 塩硝 天蚕絲 礪砂

阿仙藥 弁柄絲 海黃 アシヤ嶋 奥嶋 キガン

筭崩嶋 金巾

コストコロモンデイル 同三千里程

土産 テヤン 鮫 奥嶋 金巾 コンデレキ サラサ

ニルバアル 同三千七百五十里程

土産 猩々 緋血止石 武道具色々

ハルシヤ 同五千百里程

土産 金入織物 花毛氈 ハルシヤ皮 蘇合油 乳香 甘草

サラアタ 同四千五百里程

土産 珍珠 瑪瑙 郡青 紺青 雌黃 乳香

木香 阿仙藥 安息香 蘇合油 丹土 鮫

奥島一タラウ嶋 コンブレキ 金巾類 ギカン

サラタ嶋 花毛氈 胡黄連 紫梗

モワ 同六千里程

土産 絲織物色々 血竭

シヤムロウ 同二千四百里程

土産 錫 鯨 漆 藤 象牙 水牛角 犀角

牛皮 鹿皮 血竭 檳榔子 蘇木 鬱金

椰子油 大楓子 黑砂糖 花毛氈

トシキン 同千五百里程

土産 黄絲 節絲 綸子 縐紗 天鵝絨 紗

シヨロン 紀 紬 北絹 麝香 縮砂

セウ 亞鉛 山歸來

一タカスカル 風 人不住 同五千百里程

土産 黑檀 獸畜類

スマアタラ 同二千四百里程

土産 金 玳瑁 胡椒 藤 硫黄

ホル子ヲ 同三千九百里程

土産 デヤミン バザル 龍腦 藤 アンダ

アンボン 同三千九百里程

土産 丁子 肉豆寇 白檀 沉香 胡椒

土產 鶯哥 風鳥

バンタ

同三千九百里程

土產 胡椒 沉香 煙草 鶯哥

タルナアタ

同三千八百九十里程

土產 丁子 白檀 沉香 ビリ、肉豆寇

セイロン

同三千八百七十里程

土產 肉豆寇 胡椒 ルガラシ ビリ、鶯哥

風鳥 カスワル鳥 煙草

テイモウル

同三千八百五十里程

土產 丁子 胡椒 肉豆寇 沉香 白檀 煙草 鶯哥

マカサアル

同三千三百里程

土產 金 米 白檀 煙草

サイロン

同三千里程

土產 珍珠 肉桂 栴榔子 海ヤシ 象牙 水牛角

咬啣吧

此處ニ赫業刺兒在住ス

土產 珊瑚 琥珀 瑪瑙 丁子 龍腦 白檀

沉香 胡椒 肉豆寇 栴榔子 蠟 自鳴鐘

眼鏡 香敷 砂糖 馬 牛 羊 猪 鹿

馬鹿 麝香 猫 栗鼠 小狗 小猿 蝟

野羊 孔雀 鸚鵡 秦亨 文鳥 紅鶯哥

綠鶯哥 相思鳥 倒掛鳥 十姉妹 鵲

長生鳩 八哥鳥 白鷗 馬雞 パンヤ 石黃木乃

其外諸處出產ノ品ヲ買調ヘ日本ニ持渡ル

阿蘭陀着津平戸ヨリ長崎ニ被移事
寛永十八辛巳年為上意向後阿蘭陀船長崎湊ニ可令着
船吉被仰付之但去ル慶長十三年ヨリ寛永十七年迄三拾三年
平戸ニ着船シ去冬如例阿蘭陀人江府為拜禮平戸ヨリ令出
達之処今度右之通被仰出ニ付拜禮相濟歸路直ニ長崎ニ來
着セシメ出嶋屋鋪ニ令住館ラル

甲必丹名
平戸ヨリ附來ル通詞

西吉兵衛
志筑孫兵衛

名村八左衛門
横山又兵衛

石橋助左衛門

肝付伯左衛門

横山與三右衛門

高砂長五郎

秀嶋藤左衛門

貞方利右衛門

猪股傳兵衛

同年入津ノ阿蘭陀船九艘直ニ長崎湊ニ着船セシム則寛永十五年御制禁成シ南蠻人其節ニテ住セシ出嶋ノ地明キ屋鋪ト成シラ此時ヨリ阿蘭陀人住館ニ被仰付之

江府拜禮之事

一 阿蘭陀人平戸着船ノ内松浦家ヨリ馬廻侍壹人徒歩壹人通詞

其外人數相添前年冬中平戸ヨリ出達シ翌正月御禮相勤ル
寛永十八年長崎ニ引移以後御奉行所ヨリ爲檢使與力同心町使通詞以下數十人相添前年冬中長崎出達シ江戸ニ着翌年正月御禮相勤ル

- 一 正保四丁亥年六月南蠻船二艘當津ニ入船ス其年如例冬中甲必丹ヘシテレキコエタ江戸表ニ參着之処年來御制禁ノ南蠻船當夏日本ニ渡來ル事聞及ニ於テハ即刻可令注進之処其儀無之不屈至也トテ拜禮不相叶ハ献上物等御受用無之長崎ニ被令歸之
- 一 慶安元戊子年甲必丹テレキスノク渡來ル此年上使井上筑後守當表ニ着駕アリ新古兩甲必丹ヲ召レ去年南蠻船渡海セシ事目

明忠庵ヲ以稠シク被遂御穿鑿ノ処阿蘭陀人曾テ不及兼沢テ
存掛ケモ無之趣横文字ノ書付一通和解相添差上ルニ付筑後守江
府ニ持參有之此節迄ハ御禮御免無之故兩甲必丹共ニ長崎ヨリ
直ニ歸國ス

一 右之通兩年御禮不相勤之処筑後守甲必丹共御佗言ノ書付ヲ
於江府御披露有之蠻船之事阿蘭陀人方ニ決テ不及兼ノ段被
為聞召分ケ仍テ明年ヨリ如例御禮可相勤旨御免有之然ル處
慶安ニ巳丑年甲必丹ボロンコス渡海セリ猶又今年赫業刺兒方ヨリ
使者船フレイジユス渡來ル則江府拜禮御免ニ付其年冬中甲必丹
使者ト同道ニテ江戸表ニ參上シ翌年正月御禮相勤ル使者ノ事

後條ニ見ヘタリ

一 萬治ニ巳亥年歸府ノ阿蘭陀人乘船筑前鐘ヶ崎海上ニテ難風ニ
逢ヒ陸地ヨリ歸ル是ニテ往來共ニ毎年平戸廻リ筑前海上乗船セ
シ其翌年ヨリ長崎ヨリ上下小倉迄陸路ニテ下ノ関ヨリ大坂ニテ
乗船スルノ例ト成ル

一 明曆三年萬治元年同三年正月ノ内江戸火災有之阿蘭陀人在
留ノ旅宿打續キ三度類焼セリ依之向後正中長崎ヨリ出達シ
二月ノ内江戸ニ可令參着旨被仰付翌寛文元年ヨリ正月十五日
長崎出達ス以後定例ト成ル

一 享保十八年前年西國筋蝗入飢饉ニテ道中人馬等不便ナルヘシ

トテ四月十五日阿蘭陀人長崎出達ニ五月中江府ニ參着ニ御禮
相勤七月當表ニ歸着セリ

南部ヨリ阿蘭陀人被差送事

一 寛永二十癸未年阿蘭陀船壹艘奥州南部浦ニ漂流シ小船ニ
拾三人乘リ陸地ニ水取りニ揚リタルヲ其地ノ役人搦捕之江府ニ被
差送処御扶持等被相與御馳走ヲ被加差置ル則其年拜禮
甲必丹ヲ被召呼通詞志筑孫兵衛通辨ニテ被遂御詮議処彼阿
蘭陀船咬啣吧ヨリ乗出シ洋中ニテ逆風ニ逢ヒ無是非南部浦邊ニ
漂流セシ由其訣分明ナル故甲必丹ニ相渡サル但此節諸大名家ニ御

奉書被成下之

當年異國和奥州之浦ニ船余廻ル於南部ノ浦ニ被相爲ル処
古阿蘭陀船遭風波ノ漂流海上ニ由依中則石舟遂穿鬚海
分ニ給ル同茲長崎ノ如ク人々ニ呼寄詮議処彼船志筑孫兵衛
ト申ル如ク信天連ヲ切支丹家ノ族ト云々其後隨テ甲必丹
被問互分以來自拉遭強風日中ノ何レノ相着ル其氣を
揚陸地ニ下ルヲ渡人ノ中ノ華人數モ没サセ可申由念入
居在ル物ト向後若シ竹筒浦ニ阿蘭陀船於若存モ没ク其形
事々若シ甜魚板子具ニ一浪進モ 上意ニ及中ノ阿蘭
陀儀ニ湯代ノ日本ニ渡海高賣仕事ニ守右ノ類ニ於テ

ひく搦捕り又も赤撒等石段板に可被入念急上

十二月二日

此節甲必丹申上ル年来貴國ヲ頼ニ奉リ渡海仕ル処彼者共迄

御憐愍ヲ蒙リ難有仕合ノ趣歸國ノ上赫業刺兒ニ申聞彼方

ヨリ以使者ヲ御禮可申上旨右拾三人ノ内カウクノシノベル火矢

打ユリヤン外科カスフルヤンスノメツケルテ五人ノ者ハ當方ノ者ニ替

古可被為致由テ江戸表ニ滞留被仰付残り八人ノ者長崎ニ

連シ歸ル

一 慶安二己丑年赫業刺兒方ヨリ先年南部漂流ノ阿蘭陀人共

御厚恩ヲ蒙シ為御禮使者フシイシユス着船ス其年冬為

忝府出達ノ甲必丹ボロニコス同道ニテ江戸表ニ忝上シ翌正月

御禮相勤ル但先年ノ甲必丹奥國ニ渡リ其節ノ赫業刺兒モ

別人ニ代リ彼是及延引由去ル寛永二十年ヨリ當年迄八年ノ

間江戸滞留ノ阿蘭陀人五人共此度長崎ニ連シ歸ル志筑孫

兵衛ハ通辨分明ナリシ為御褒美三百俵拾人扶持被下置

依願於長崎通詞役被仰付御扶持方ハ相離ル

一 寛永二十年甲必丹出達ノ事

出典 皇極外史之卷

一 寛永二十年甲必丹出達ノ事

出典 皇極外史之卷

一 寛永二十年甲必丹出達ノ事

出典 皇極外史之卷

出典 皇極外史之卷

出典 皇極外史之卷

出典 皇極外史之卷

出嶋屋鋪修造之事

一 寬永十一甲戌年出嶋屋鋪ヲ新ニ修造アリ其根元全ク
阿蘭陀人所住ノ為ニ非ス是迄南蠻人長崎町宿ニ居
テ諸人ト會合スル故邪宗門ノ種類断絶スル事無レ之
依之市中ヲ離レ海中ニ出嶋ヲ築キ屋鋪ヲ建蠻人ヲ
在往致サセ高賣用向フ外一切無用ノ者出入ヲ堅ク可
停止旨被仰付其節當表町人二十五人ノ者普請料ヲ出シ
家宅土藏等ヲ造作シ蠻人方ヨリ宿代ヲ受用スヘキ旨願
之通被差免寬永十三年普請成就シ蠻人共在住シ宿
代銀八拾貫目ヲ町人二拾五人ニテ配分セリ則大門ニ定番之

者二人宛相詰蠻船在津中ハ町使二人宛加番相勤シム

一 寬永十三丙子年ヨリ同十五戊寅年迄南蠻人出嶋ニ在住
三ヶ年ニ及シ此處前年丑十月頃ヨリ天草嶋原ノ鄉民等蜂
起シテ及籠城処翌寅二月一揆悉ク誅戮セラル然レハ蠻人
共日本ノ地ニ差置ル事甚以不可然ノ旨ニテ當年上使太田
備中守長崎ニ被差越南蠻人日本渡海一切為嚴禁之旨被
仰渡在住ノ蠻人不殘被令歸國之此時出島明屋鋪ト成ル然
處寬永十八年平戸ヨリ阿蘭陀人長崎ニ移レシニ付則右ノ
出嶋ヲ阿蘭陀人住館ニ被仰付

出島屋鋪圖



出島境内軒數土藏數等之事

一 出島屋鋪總坪數三千九百六十九坪壹分爲地子銀壹貫六百七拾

三匁壹分三厘宛年々上納ス

總廻リ堀貳百八拾六間二尺九寸

南側百拾八間二尺七寸

北側九拾六間四尺九寸

東側三拾五間四尺五寸

西側三拾五間三尺八寸

町筋長百拾一間 幅一間半

西方荷役場水門築出シ 豎拾五間 横六間

ヶ所間數貳百四間九合二三 乙名屋鋪共ニ

軒數四拾四 乙名并町人家藏之内藏數三拾

軒數二拾一ヶ所外家藏并番所小屋共ニ

公班衙藏 賜荷藏

西之御用藏 水門御檢使場

札場 札場御檢使場

東之七名部屋 通詞部屋

南之町人番所 阿蘭陀臺所

花富涼所 本門番所

辻番所 火消道具置所

伊萬里見世小屋道具入

風呂屋 鳩小屋

宿賃銀五拾五貫目 阿蘭陀人年々差出之

但壹間ニ付平均貳百六拾八文三分宛

軒數二拾五ヶ所 町人二拾五人配分之

御高札

出高町

日本人異國人御法度及宵々不依何事忍事とたらし

禮物を出し頼りしを志度申し候し 縦同敷

事り候し 其禮物一俵 汚穢

員りしを辱し 若湯至許人あり 此れは

罪科者也

永享元年十月日

禁制

一 傾城ノ外女入事

一 諸知進ノ者及食入事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

一 出湯廻リ榜示及杭ノ内水事

榜示木

出嶋南方堀外海中ニ立之

是月一切私名可入者也

二十日

禁制

一 傾城ノ外出入事

一 吉野ノ内出入事

一 諸般出入者其已合入事

一 諸般出入者其未合入事

一 諸般出入者其未合入事

一 諸般出入者其未合入事

一 諸般出入者其未合入事

謝宗清

出陣南六段中三三三

